

【地理教育プランニング実習】火曜 3・4 時限

教育学部第二類社会系コース B135818 杉若剛志

第二章 社会科で育成する資質・能力に対応した授業づくり

1. 授業「誘致？反対？‘NIMBY’施設－放射性廃棄物処分場の誘致をめぐる住民討論を組織する－」

(1)授業の目的

- ・ NIMBY 概念を用いて、住民間の対立と合意形成の難しさの本質に迫ろうとした。
- ・ 各立場にそれぞれ異なった資料を与えるジグソー形式をとり、立場が異なれば、問題に対するアプローチや切り取り方が変わってくることを体験させようとした。

(2)授業の展開

導入 ある地方都市の市長という立場から地域財政を立て直すための政策を考えさせる
※「まちおこし」といったポジティブな課題とすることで創造的な意見が出やすいように工夫

展開 1 東北地方における「指定廃棄物」処分場を巡る問題について新聞記事を用いて考察させる。

※考察のステップと視点

- ①問題について行政の長がどのような対応や発言をしているのかを新聞記事をもとに分析する（言説分析の視点）
- ②立地候補地の地理的な特徴を把握する（地理的・空間的な視点）
- ③負担の公正さや公平さを問う（社会学的な視点）←NIMBY 概念

展開 2 展開 1 の学びをふまえて、仮想の事例学習を小集団で行い、合意形成を図る
※事例学習の想定：ある町で町長・行政が高レベル放射性廃棄物の処分場の調査に立候補を表明し、それを巡って、反対・賛成の意見に大きく二分した住民が討論する

立場は、A 町長・行政（賛成派）・B 地域住民（賛成派）

C 地域住民（反対派）・D 都会に出て行った若者（どちらの立場でも可）

終結 全ての小集団の結果とその理由・意見が書かれたホワイトボードを黒板に貼り付け、全体で共有

また、ワークシートにて生徒に授業の振り返りをさせる

2. 授業づくりのプロセスとポイント

(1)授業づくりのプロセス

- ・ 現代社会において、物事の複雑性や不確実性が増大
⇒リスクの管理方法やリスク・コストをどのように分担していくのが課題



両立の難しい価値観・考え方のぶつかりを身をもって感じることができるような実践

(2)授業づくりのポイント

- ・合意を形成させるよりも対立を重視し、多様な考えや価値観が競合する合意形成の過程の困難さを体験させる。
- ・ESD（持続可能な開発のための教育）の視点を導入する
⇒未来世代への責任を自覚した問題発見的な討論が行える。
- ・生徒の立場・役割を固定し、生徒の授業での体験を、複雑な現実社会への参画の状況に近づける。

(3)授業者の考える課題

- ・十分な時間の確保
⇒問題に対して、多様な視点や意見を踏まえて、生徒は意見を形成できたであろう。
- ・適切な資料配付
⇒全ての資料を生徒に与え、じっくりと目を通させ、深く思考できる沈黙の時間とそれをもとにした自己の意見形成の時間を設ければより効果的であった。

(4)授業者のまとめ

- ・これからの社会で求められるのは、様々な意見・考えを踏まえた上で、自分の意見を柔軟に再構成できる力を育成すること。
- ・1時間の授業を越えて教科全体を貫く大きなねらいや軸を定め、生徒の持続的な発展を可能にする仕方で授業を持続的に構成していく必要がある。

3. 研究者から見た授業づくりの特徴

(1)大きな特徴

- ・討論において生徒の主張間の対立が深まり、容易に合意形成に至らないことが当初から予定した授業構成になっている点
- ・生徒各自に未来への責任意識を求め、当面の自己利益のみではなく、それを越えた長期的な公共利益の観点からの思考と主張を求めている点

(2)具体的な特徴

- ・感情的な対立が陥る恐れがあった教材だが、生産的で意義のある対立をつくり出せていた点
⇒授業が丁寧で熟練されたステップを踏んでいたため。

(3)改善点

- ・実践者が生徒に理解させなかった合意形成困難性の原因を生徒は理解できた。
しかし、ESDの視点を取り入れているのであれば、授業の最後に生徒個々の判断を求めてもよかったのではないか。

4. メンターから見た授業づくりの特徴

(1)本時の構成

- ①市長の立場で町の振興のためのアイデアを自由に発表。
 - ②最終処分場候補地を巡る新聞記事の読解を通しての「負の側面」の事実理解
 - ③町がかかえる現実の問題を踏まえた意見作成と合意形成
- ①, ②で自治体振興における「光と影」を考える「素地」をつくり、③に取り組める

(2)改善点（合意形成の指導ポイント）

- ・無理のない時間設定と思考活動

⇒小集団の思考活動を3ステップに

ステップ1：立場固定で広い視野から意見を考え、発表し共有する。

ステップ2：立場固定を離れ、自分が支持したい立場で意見形成を行う。

※ツールミン・モデルに工夫を加えたワークシートの作成をし、生徒の論理的思考を支援する

※ツールミン・モデル：主張をする際にはその主張を裏付ける根拠が必要であり、また主張をするきっかけとなった事実やデータがある。

主張に至るまでのプロセスを図式化した、議論レイアウト

ここでの工夫は、主張を考える際に、さらにその主張には条件があることを考えさせるようにしている。

ステップ3：相手の主張の一致点と対立点を整理後、合意形成を目指す。

5. それぞれの立場から見える課題

- ・授業時間の設定と生徒の思考活動をどこまで求めるのか。

⇒生徒に求める思考活動によって何時間授業数を設けるのかが変化する。

- ・生徒の思考活動を支援する適切な資料・工夫の必要性

⇒配布資料の選定やワークシートの工夫（特にツールミン・モデルをもととした）によって生徒の思考がより深まる。

6. 考察

私はメンターがこの授業における改善点として指摘したツールミン・モデルに工夫を加えたワークシートの作成には賛成である。なぜなら、この授業の目的としては生徒が合意形成に至るまでの論理的思考に重きを置いているので、その支援となるワークシートの工夫はしなくてはならないと考えるからである。